



TITLE:

世界市場と世界経済 - 「資本主義一般の上部構造としての帝国主義」という見地から -

AUTHOR(S):

関下, 稔

---

CITATION:

関下, 稔. 世界市場と世界経済 - 「資本主義一般の上部構造としての帝国主義」という見地から -. 経済論叢 1972, 109(4-6): 505-527

ISSUE DATE:

1972-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/133472>

RIGHT:

# 經濟論叢

第109卷 第4・5・6号

---

哀 辞

故 高田保馬名誉教授遺影および略歴

經濟發展における軍需生産の役割について……	木 原 正 雄	1
社会資本と資本蓄積……	池 上 惇	25
ドイツ国民經濟會議における自由貿易……	藤 本 建 夫	42
コンビナートの企業構造……	下 谷 政 弘	59
世界市場と世界經濟……	関 下 稔	83

書 評

S. コトグループ, J. ダンハム, C. ヴァンブルー著

「生産性交渉と職務拡大のケース・スタディ」

1971年……	赤 岡 功	106
---------	-------	-----

---

昭和47年4・5・6月

京 都 大 学 經 済 學 會

## 世界市場と世界経済

——「資本主義一般の上部構造としての帝国主義」という見地から——

関 下 稔

### I はじめに

われわれは、前稿<sup>1)</sup>において、マルクスの『経済学批判体系』とレーニン『帝国主義論』との関係を二重の意味——後者を前者からの継続、発展であるとともに、質的転化をとまなう、新しい特殊な段階でもあることを、歴史過程ばかりでなく論理次元の問題としても明らかにすること——でとらえるという視角から、とりわけ、両者の段階の相違を、それぞれの分析の出発点にあるものが、「体系」の「世界市場」にたいし、『帝国主義論』の「世界経済」であるとして、概念的にも明確に区別している杉本<sup>2)</sup>、吉信<sup>3)</sup>両氏の問題意識を発展させる方向で考えてみた。その意味するところは、このような把握にたつことによって、一方では、歴史過程を媒介することなしに、『資本論』または「体系」プランの任意の命題からの直接の、観念的な上向をはかる論者(たとえば、宮崎厚一<sup>4)</sup>氏や堀晋作<sup>5)</sup>氏)や、他方では、この歴史的段階の相違を一面化して、『資本論』=産業資本主義段階の理論、『帝国主義論』=独占資本主義段階の理論として、両者を並列的にならべ、固定化させることによって、とりわけ両者の内的な論理的連関を見失ってしまう傾向(たとえば、ソ連の『経済学教科書』)<sup>6)</sup>

1) 拙稿「マルクス・エンゲルスにおける世界市場と恐慌」京大『経済論叢』第108巻第6号、1971年12月、所収。

2) 杉本昭七「マルクス経済学の体系化に関する根本問題」『経済評論』1967年2月号所収。

3) 吉信 稔「レーニンと世界経済論」『経済』1970年4月号所収。

4) 宮崎厚一『経済原論の方法』上、未来社。

5) 『世界経済評論』1967年3月号。

6) 佐藤金三郎氏は、この二つの偏向を「論理=歴史説」の「論理主義」的偏向と「歴史主義」的偏向として、分類、整理されている。(佐藤金三郎『資本論』と宇野経済学」新評論、214-227ページ。)

などの誤りを克服することができると考えられるからである。そして、こうした作業を通じて、現代帝国主義の構造と運動法則を解明するにあたっての方法的視座を確立することが可能になると思われるからである。

その際、前稿では、自由競争から独占への移行にあたり、晩年のエンゲルスがその変化を資本主義の基本的特徴との関連のなかでどのようにみていたかを、中心において検討してみた。本稿においては、それをレーニンの側から検討することを課題とする。たとえば、レーニンは、『帝国主義論』その他、帝国主義について論じた著述のなかで、マルクスの「体系」における「世界市場」とは区別される「世界経済」という範疇を使用している。

「もし、20世紀の初めにあたる歴史的＝具体的時代としての金融資本の時代の『純経済的』諸条件についてかたると、『超帝国主義』という死んだ抽象……にたいする最良の答えは、この抽象に現代の世界経済の具体的＝経済的現実を対置することである。」<sup>7)</sup>「エヌ・ブハーリンの労作の科学的意義は、とくに、彼が、全体としてまともにも高度に発展した資本主義の一定の段階としての、帝国主義に関係のある世界経済の基本的な事実を考察しているところにある。」<sup>8)</sup>

このように、レーニンによって述べられているものは、『帝国主義論』の分析の対象となるものが、20世紀初頭の金融資本の支配する独占の時代であり、その意味で、「体系」の対象とする19世紀の産業資本の支配する自由競争の時代と、同じ資本主義でありながら、歴史段階を異にするということだけにとどまらず、論理次元においても、それを「世界経済」という範疇によって、「体系」の「世界市場」と区別しているということである。つまり、「体系」の分析の出発点に位置し、それとともに、叙述の最終範疇として措定されているものが「世界市場」であるのにたいし、『帝国主義論』におけるそれは「世界経済」であるということである。そして、この「世界経済」は古い「世界市場」

7) 『レーニン全集』第22巻、大月書店、314ページ。

8) 同、113ページ。

を基礎として、そのうえに、レーニンが指摘した帝国主義を特徴づける新しい経済現象をつけ加えることによって成立するものであり、より包括的な概念である<sup>9)</sup>、ということができよう。この新しい経済現象のうち、もっとも重要なものは、「帝国主義は、とりわけ資本の輸出である」<sup>10)</sup>とか、「帝国主義のもっとも本質的な経済的基礎の一つである資本輸出」<sup>11)</sup>といわれているように、資本の輸出であり、しかも、この資本輸出が商品輸出に代わって典型的となった時代のものである。

この資本輸出が典型的になったということの意味内容を、実証を通じて解明することは本稿の目的ではない。ここでの課題は以下の疑問から発生する。すなわち、古い世界市場を基礎にして、そのうえに、帝国主義の基本的な特質である資本輸出を含む、あらたな経済現象をつけ加えることによって成立する、より包括的な概念であると吉信氏によって指摘された世界経済の説明は、それだけでは、その内容を十分に明らかにしたことにはならないのではないかということである。というのは、それはせいぜい、世界市場と世界経済の相違を、後者を構成する新しい重要な現象をとりだすことによって説明したにとどまるからである。問題を一步進めて、このより包括的であるということの意味を問うてみると、新たな現象は、単に、つけ加えられるだけなのか（つまり、平面的な関係なのか）、それとも、それらによって専一的に支配されてしまうのか（つまり、純粋な支配）、そのいずれでもなく、新たな現象の主導のもとに、両者が関連しあいながら存在するのか（古い土台のうえに、それとならんで存在する上部構造）、といった疑問が生じてくるだろう。この疑問に答えるためには、「体系」と『帝国主義論』との関係について、レーニンがどのように考えていたかという、より全面的な場面に問題をうつしかえて、検討することが必要になってくるように思われる。そして、このことが明らかにされてこそ、さきの疑問についても回答を与えることができるように思われる。したがって、本稿は、ロシ

9) 吉信 庸，前掲論文，150ページ。

10) 『レーニン全集』第22巻，前掲，394ページ。

11) 同，319ページ。

ア社会民主党の綱領改正問題でのレーニンの主張を中心に、**「体系」と『帝国主義論』との関係をさぐり、それを通じて、世界市場と世界経済との違いと関連を、後者が前者を基礎としたより包括的な概念であるという指摘にとどまらず、より一層深く解明してみたいと思う。それは、同時に、この問題での、わが国の様々な論者の誤りにたいする批判ともなるだろう。**

## II

「交換の発展は、文明世界のすべての国民のあいだにきわめて緊密な結びつきを打ちたてたので、プロレタリアートの偉大な解放運動は国際的運動にならざるをえなかったし、またずっと前からそうになっている」という文章ではじまるロシア社会民主党の1903年の綱領は、レーニンの指導のもとで作られたものであるが、この綱領の理論的部分の大半をなすものは、資本制的生産様式の発展法則であり、要するに、マルクスの「体系」の精髓である<sup>12)</sup>。だが、1917年の二月革命ののち、古くなったこの綱領を改正する必要が生じ、その改正方向を8項目に要約したが、なかでも、総論部分の中心をなす資本制的生産様式の発展法則を論じたところでは、「せまりつつある社会主義革命と結びつけて、帝国主義と帝国主義戦争の時代とを」<sup>13)</sup> どのように評価し、それをどのように綱領にもりこむか、ということが議論の中心となった。そこでのレーニンの意見は、「体系」の精髓とも呼ぶべき、資本制的生産様式の一般的な運動法則を要約した、旧綱領の理論部分はそのままだとしておいて、『帝国主義論』で与えられた新しい帝国主義段階の基本的特質を要約したものを、それにつけ加えるというものであった。これにたいし、ボゴレポフ、オポーコフ、ソコリニコフの3人からなる綱領部会や、それに同調するブハーリンなどの意見は、綱領の総論に、単に追加するのは、異質なものを機械的に結合するにすぎず、むしろ、古い綱領を切りすてて、新たに、帝国主義段階の特徴づけだけを与える新しい

12) 見田石介『「資本論」・『帝国主義論』・国際経済論』大阪市大『経済学雑誌』1967年5月号, 34ページ。

13) 『レーニン全集』第24巻, 大月書店, 286ページ。

綱領に代えるべきであるというものであった。そして、両者の論争は、結果的には、レーニンの勝利におわったのだが、その過程で、特にレーニンが批判の対象としたのは、ひとつは、帝国主義の専一支配（あるいは、純粋帝国主義）という主張であり、もうひとつは、帝国主義の諸特質を、個々バラバラに切りはなして、それらを資本主義の基本的特質のそれぞれ該当する部分のあとに、寄木細工のようにつけ加えるという主張であった。以下、その過程をすこし詳しくみてみよう。

レーニンは、まず第一に、資本主義一般の基本的特質をのべた旧綱領に、帝国主義の特質をつけ加えることを機械的だとする批判にたいし、それが現実の資本主義の発展であったのだという反論を加える。「商品生産から資本主義への発展の特徴づけをあたえている古い綱領を削除するのは、理論的に正しくないとおもわれる。古い綱領にはまちがったところはない。発展はそういうふうにおこなわれてきたし、いままもそういうふうにおこなわれている。なぜなら、商品生産は資本主義を生み、そして資本主義は帝国主義に導いたからである。」<sup>14)</sup> これは一般的な世界史の見通しであり、絶対正確にたしかめられた事実である。そして、「マルクス主義党の綱領は、絶対正確にたしかめられた事実から出発しなければならない。」<sup>15)</sup>

第二に、このように、それが資本主義発展のすじ道であったとするなら、帝国主義になっても、資本主義一般の基本的特質は変化しないということである。「現在の構文では、綱領の総論の部分は、社会経済体制としての資本主義のもっとも主要な、もっとも本質的な特質の記述と分析をふくんでいる。これらの特質は、帝国主義すなわち金融資本の時代になっても、基本的には変わらない。帝国主義は、資本主義の発展の継続であり、その最高の段階であり、またある点では社会主義への過渡段階である。

だから、資本主義一般の基本的特質の分析に帝国主義の分析をつけくわえる

14) 『レーニン全集』第27巻、大月書店、128ページ。

15) 同、130ページ。

のを、私は『機械的』だとみとめることはできない。』<sup>16)</sup>

この意味で、帝国主義は、まさに、資本主義の発展の継続なのである。そうであれば、帝国主義になっても、資本主義の基本的特質は変化せずに残るのであるから、第三に、現実存在しているのは、資本主義の基本的特質と帝国主義の特質との両者である。「実際に、帝国主義は資本主義を上から下まで改造するものではなく、また改造することもできない。帝国主義は、資本主義の諸矛盾を複雑にし、激しくし、自由競争と独占とを『絡みあわせる』が、交換、市場、競争、恐慌等々を排除することは、帝国主義にはできない。

帝国主義は、寿命がおわろうとしてはいるがまだおわってはならず、死滅しつつあるがまだ死滅していない資本主義である。純粹の独占ではなくて、交換や、市場や、競争や、恐慌とならんで存在する独占——これが帝国主義一般のもっとも本質的な特質である。』<sup>17)</sup>つまり、資本主義と商品生産一般との基本的特質である自由競争のなかから、その対立物として独占があらわれたが、この独占は自由競争を排除せず、自由競争のうえに、これとならんで存在し、そのことによって、激しい矛盾、軋轢、紛争を生みだしている。

だから、この意味からすれば、ブハーリンその他のように、純粹帝国主義（あるいは帝国主義の専一支配）を主張するのは、明らかに、理論的にも、現実のうえからも誤りである。「資本主義という基礎をもたない純粹の帝国主義などは、かつて存在したことはないし、どこにも存在しておらず、今後もけっして存在しないであろう。』<sup>18)</sup>だから、「交換、商品生産、恐慌等々の分析を、純一体としての帝国主義の分析に『代える』』ということは、理論上誤っている。なぜなら、そういう純一体などは存在しないからである。存在するのは、競争から独占への過渡である。だから、交換、商品生産、恐慌等々の一般的分析はそのままのこしておいて、成長しつつある独占の特徴づけをつけくわえる綱領のほうが、ずっと正しいだろうし、はるかに正確に現実を再現するだろう。この

16)、17) 『レーニン全集』第24巻、前掲、492ページ。

18) 『レーニン全集』第29巻、大月書店、152ページ。



ように、競争と独占という、たがいに矛盾する『原則』を結合しているということ、このことこそ帝国主義の本質であり、このことこそ崩壊すなわち社会主義革命を準備するものである。』<sup>19)</sup>

第四に、純粹帝国主義は誤りであり、存在するのは、資本主義の基本的特質と帝国主義の基本的特質との両者であるが、それは、単に、両者が並列的に存在しているのではなく、帝国主義は古い資本主義の上部構造なのであり、帝国主義の古い資本主義にたいする支配である。「マルクスはマニファクチャアのことを、それは大量な小規模生産のうえに立つ上部構造であると言ったが、帝国主義と金融資本主義は、古い資本主義のうえに立つ上部構造である。その上層を破壊するなら、古い資本主義が現れるであろう。古い資本主義を伴わない純一の帝国主義というようなものがあるという見地をとることは、希望を現実と取りちがえることを意味する。……存在するものは、幾多の分野で帝国主義にまで成長した古い資本主義である。その傾向は、もっぱら帝国主義的なものである。根本的な問題は、もっぱら帝国主義の見地からのみ検討することができる。国内政治でも、対外政治でも、大きな問題で、この傾向の見地以外の見地から解決できるような問題は、一つもない。だが、綱領がここで述べているのは、そのことではない。現実には、古い資本主義という、きわめて広大な基層が存在している。また帝国主義という上部構造があり、この上部構造が戦争をひきおこし、その戦争からプロレタリアートの独裁の端緒が生まれた。』<sup>20)</sup>

そして、第五に、帝国主義の様々な標識を個々バラバラにしたうえで、古い綱領のそれぞれの個所にわりふるやり方は誤りであるという批判である。「同志、ソコリニコフは、この解明とこの評価をいわばばらばらにあたえ、帝国主義のさまざまな標識を綱領のいろいろの節に割りふるほうが適切であると、主張している。私は、綱領の特別の節または特別の部分でこれをおこない、帝国

19) 『レーニン全集』第24巻、前掲、492-493ページ。

20) 『レーニン全集』第29巻、前掲、155-156ページ。

主義について言うべきことはすべてそこにまとめるほうが、適切であると考え  
る。」<sup>21)</sup> なぜなら、ソコリニコフのようなやり方では、帝国主義の定義の様々な  
断片が、まったく一貫性を欠いたやり方で寄木細工のように、いろいろの箇所  
にまぎ散らされているだけであって、「帝国主義についての全体的な、まとま  
った観念はえられ」<sup>22)</sup> なくなり、きわめて機械的で、非論理的なものになって  
しまうからである。

以上、われわれは、「体系」の精髓である旧綱領にたいし、『帝国主義論』  
の精髓をどうつけ加え、それによって、どのように新綱領を作成すべきかをめ  
ぐるレーニンの主張をみてきた。これを、「体系」と『帝国主義論』との関係  
というわれわれの課題から簡単に整理し直せば、ひとつは、帝国主義は資本主  
義一般の基本的諸特質の発展およびその直接の継続として生じたのであり、そ  
れは、資本主義がきわめて高度の発展段階に到達し、その基本的特質のいくつ  
かがその対立物に転化したときにあらわれたのである。しかも、帝国主義は資  
本主義を上から下まで改造するものではないので、資本主義の基本的特質を排  
除できずに、そのうえに、それとならんで存在している。この意味からすれば、  
正確には、帝国主義は、古い資本主義のうえに立つ上部構造であると表現でき  
る。したがって、帝国主義という上部構造の基底には、たえず古い資本主義と  
いう土台があり、それによって基礎づけられているのだが、しかし、問題は、  
両者が並列的にあるのではなく、帝国主義という上部構造によって、主導され、  
支配されているのであり、したがって、その傾向はもっぱら帝国主義的なも  
のであり、根本的な問題は、もっぱら帝国主義の見地からのみ検討することが  
できるということである。これがもうひとつのことである。以下、これらのこ  
とをさらに詳しく立入って論じてみよう。

21) 『レーニン全集』第26巻、大月書店、158ページ。

22) 同、151ページ。ソコリニコフのやり方では、旧綱領で、労働運動は国際的であるとのべたと  
ころに、資本輸出、世界経済、闘争の世界革命への移行を挿入し、恐慌を論じたところを、恐慌  
と戦争に加え、そこに世界分割を挿入したりなどしている。同、150ページ。

## III

ここでは、わが国の論者のいくつかの傾向についてみてみよう。まず第一に、「体系」と『帝国主義論』との関係を考える際に、それぞれの分析の出発点にあるものの総体をどう指定するかという問題である。それについては、レーニン自身、『帝国主義論』の序文において、世界的規模における現代の独占資本主義の総結果とか、すべての交戦列強と全世界との経済生活の基礎にかんする資料の総体とかをとりだす必要を述べているように、また、われわれがこれまで展開してきたように、「世界経済」として、この総体、総結果を指定する必要があることはいうまでもないだろう。そして、このような総体そのものの移行を考えていかなければ、個々の帝国主義の諸特質をバラバラに語っても、それだけでは帝国主義についての全体的な像を正しく描くことはできないだろう。この点では、『資本論』なり、「体系」プランなり、の個々の、任意の命題からの直接的な演繹をはかる宮崎氏や堀氏の誤りは明白であり、これについては、すでに、前稿において展開した。だが、問題は、これに一応批判を向ける論者の中にも、結果的には、同種の誤りが散見することである。たとえば、金子ハルオ氏は、「レーニンは、このような経済学の方法(＝マルクスの経済学の方法。引用者)を継承し、『帝国主義論』の構築にあたって、なによりもまず資本主義の最新の段階としての帝国主義を特徴づけるときに、経済上の新しい諸事態＝諸現象を総体としてとりあげ、それらとそれらの相互関係を具体的に分析することから出発した」<sup>23)</sup>のであって、「なにか『資本論』の理論的諸命題または理論的諸範疇から観念的・演繹的に展開されるという意味ではけっしてない」<sup>24)</sup>といわれる。そのかぎりでは、異存はないが、問題は歴史的段階の相違、論理次元の相違をいう際のそのしかたであり、内容である。氏は、帝国主義の歴史的現実を総体として把握することを主張されながらも、その総体がどのような範

23) 金子ハルオ『『資本論』の創造的發展として『帝国主義論』『経済』1967年12月特大号、202ページ。

24) 同、203ページ。

疇によって把握されるかについては明らかにされていない。むしろ、それよりも氏の関心は、「生産の集積」＝「独占」の検出にむかっており、それをもって段階的相違、論理次元の相違の例証とされているようである。われわれは、無論、独占が帝国主義を規定する段階的範疇であることを認めることにやぶさかではないし、これについては後に、詳述するつもりである。だが、このような独占を生みだす歴史的・前提そのものの総体の変化を問題にし、それを正しく範疇的にも指定しないかぎり、いかに独占を抽出し、それをもって段階の相違を明らかにするとされても、十分な説明とはならないだろう。だからこそ、氏は、『資本論』と『帝国主義論』との論理次元の相違を問題にした原田三郎氏の見解を鋭いとしながらも、前者から後者への直接の上向の契機を、原田氏のように後半体系にもとめるのではなく、競争にもとめるということをしているのである。「独占は、諸資本の自由競争のなかから自由競争の作用によって自由競争とならんで形成されるのであるから、『資本論』の『帝国主義論』への理論的上向＝発展は、むしろ「経済学批判」プランの……「競争論」に媒介されておこなわれるのではないだろうか。」<sup>25)</sup> このように、歴史的現実を総体として把握するとされながら、その実、「体系」プランの競争を契機にして——後半体系を一切捨象したまま——『帝国主義論』への上向を考えるやり方には、宮崎氏や堀氏のそれと同種の誤りが存在しているように思われる。われわれが、さきに、新綱領作成過程でのレーニンの見解をみてきたところで、明らかにしたように、旧綱領は、商品生産から世界市場恐慌までを含む、資本主義世界体制の全体像を描いているのであり、それは、いわば『資本論』のではなく、「体系」の精髓なのである。この後者からの『帝国主義論』への転化が問われているのであり、その総体を「体系」の「世界市場」にたいし、「世界経済」として指定しているのである。この事実を無視した金子氏の見解は、歴史的現実を総体として把握するという課題に応えられていないといわざるをえない。

第二に、国際経済分野において、理論的体系化が考えられる際にも、同様に、

25) 同、210ページ。

いくつかの偏向がみうけられるように思われる。従来より、マルクス経済学の立場から国際経済なり、世界経済なりの理論的体系化を考える際に、きまってその方法的ベースにされたものは、マルクスの「体系」プランであった。ここから、一方では、プラン万能の偏重が生じ、宮崎氏のように帝国主義はおろか、現代の帝国主義までを含む、全ての経済事象の説明が「体系」プランを内容的に豊富化することによって可能だとする極論までを生んだことはすでに前稿で検討した。それと同時に、他方では、これと同一の方法的視角から出発しているが、宮崎氏のように「体系」プランを忠実に再現することではなく、それを適当に（自己流に）作りかえることによって、現代の問題まで全て、解明することが可能とする論者がいる。たとえば、行沢健三氏は、プランの後半の最初に位置する「国家」を国民経済とおきかえ、それを『資本論』に解消させることによって、『資本論』（＝国民経済）—外国貿易—世界市場なる構想をえがく<sup>26</sup>。このように、プランの「国家」＝「国民経済」＝『資本論』という自己流の解釈をほどこしたうえで、その基礎上に、国際経済学、世界経済学の理論化をはかろうとされる。しかも、それらのなかには、「体系」プランの後半におかれていた外国貿易なり世界市場なりにとどまらず、東西貿易や資本輸出の問題までが含まれてくるのである。こうなると、一体、国際経済、世界経済の理論的体系化の出発点において「体系」プランと帝国主義段階、あるいはⅡ大戦後の東西貿易等との関連はどうなるのかまったく不明であり、これらのことを考慮することなしに展開されるものは、木に竹をつなぐものであり、方法的な雑炊以外の何物でもありえないだろう。しかも、氏にあって致命的な欠点とみえるものは、マルクスの「体系」プランにもとづいて（たとえ自己流に作りかえられたものではあっても）、国際経済、世界経済の理論的体系化を考えており、一見マルクス主義的にみえるが、そのことによって、『帝国主義論』が一切、その方法的視座から欠落してしまうことである。『帝国主義論』のない国際経

26) 行沢健三『国際経済学序説』ミネルヴァ書房、64ページ。なお、国家＝国民経済＝『資本論』という把握そのものについての批判は、すでに、別稿で展開した。拙稿「ブルジョア社会の国家形態での総括と後半体系」京大『経済論叢』第106巻第5号、1970年11月、参照。

済学なり世界経済学なりを語ること自体がすでに無意味なものとなるだろう。

宮崎氏のように、プランにあくまでも忠実になろうとして、その所定範囲の中に現代の問題までも含めようとする傾向や、行沢氏のように、プランを適当に作りかえることによって、現代の問題までその所定範囲の中に含めようとする傾向は、ともに、結果的には、『帝国主義論』の位置をきわめてあいまいなものにし、過少評価するものとならざるをえないだろう。それほど極端ではないまでも、マルクスの「体系」プランに即して、その後半体系の具体化をはかるという立場から、国際経済、世界経済の理論的体系化を企てる従来の論者の多くに、多かれ少なかれ、同様の傾向をみてとることができるように思われる。たとえば、貿易を通じる国際間の搾取の問題を原理的に解明する意図で国際価値論争が行なわれたが、そのようにして解明された国際価値論が帝国主義段階では具体的にどのように取扱かわれるのかについては、ほとんど言及されないままになっている。また、「体系」プランの後半の具体化というところから、外国貿易、世界市場の問題が取りあつかわれるが、帝国主義段階になると資本輸出がそれに追加されて論じられるだけで、この資本輸出と外国貿易との関係がこの段階ではどのように相互に作用をし合いながら進行するのかについては、ほとんど言及されないままになっているように思われる。これらの問題については、帝国主義は古い資本主義の上部構造であるというレーニンの指摘に沿って、原理的に追求する必要があると思われるが、それについては後で詳述しよう。

第三に、国際経済分野の中に特に顕著に現われた「体系」プランの後半の具体化が国際経済、世界経済の理論的体系化につながるという主張は、逆に、一部の人々をプランからの絶縁を宣言させるにいたっている。入江節次郎氏は、「長い間、いわゆる「プラン」問題が、マルクス経済学の発展を阻止する呪縛になっていたと考えられるのですが、われわれの検討をつうじて、ここに、きっぱりと「プラン」は切ってしまったほうがよい」<sup>27)</sup>とまでいわれる。その理

27) 「帝国主義論の方法」同志社大学人文科学研究所『社会科学』別冊、1969年、250ページ。

由は、「レーニンの『帝国主義』は、『資本論』の理論を、間違いなく、前提とするものではあろうけれども、『資本論』のたんなる継続・発展の理論体系としてとらえられるべきでない」とすれば、その対象は、いわゆる『資本論』のプランの後半の体系の路線でないしは、発展路線上に構築・展開されるべき理論体系の対象が、それに相当すべきであるというように指定して考えていってはならない」<sup>28)</sup>からである。だが、プランの後半を具体化させれば、帝国主義を含む現代の問題まで解明しつくすことが可能であるとするのは誤りであるとしても、そのことは、プランの後半の展開そのものの有効性をも否定するものであろうか。さきに、金子氏にたいする批判の中で述べたように、商品生産から世界市場恐慌までの「体系」の上部構造として『帝国主義論』はあるのであり、そのことを考えれば、後半体系そのものを否定するのは誤りであろう。この点では、見田氏が「二つの理論が、それぞれ産業資本主義段階および帝国主義段階においてそれぞれ歴史的に相対的な意味をもち、それぞれ別種の論理構造と方法とをもっているものでなく、ちょうど自由競争が独占の直接的対立物でありながらその一般的な基礎、土台をなし、独占がその一つの形態、その上部構造をなしているのと同じように、『経済学批判体系』は『帝国主義論』の基礎、土台をなし、そこに立派に生きつづけており、後者はその前提のうえに積み重ねられた上部構造であること、つまり二つは抽象的なものから具体的なものへと一貫して向上する論理の糸によってつながれているということ、このことを示している」<sup>29)</sup>といわれるとき、われわれは、それに同意するものである。つまり、商品生産から資本主義へ、そしてこの資本主義の生産の集積が特定の高さで独占を生み出したという資本主義そのものの発展過程、その連続性を無視するようになってはならないのである。だが、この見田氏の指摘は、「体系」と『帝国主義論』との関係を見る際の、一つの側面、すなわち、両者の連関の側面について語っているのであって、この連関を前提にしたうえでの、両者の

28) 入江節次郎『帝国主義論序説』ミネルヴァ書房、12-13ページ。

29) 見田石介、前掲論文、35-36ページ。

質的な違い——歴史過程でも論理次元でも——が問われる際には、十分な回答にはなりえないように思われる。この側面での回答を与えるには、「体系」の「世界市場」と区別される「世界経済」を『帝国主義論』の分析の出発点であり、それと同時に、矛盾が爆発する最終の範疇として措定することが必要とされる。

第四に、帝国主義段階における主要な矛盾をなにに求めるかという問題である。この点では、富森虔児氏の展開は極めて特異なものである。氏によれば、帝国主義の主要矛盾を独占と自由競争（あるいは、競争）との間の矛盾とすることは間違いであるとされる。なぜなら、「厳密な意味での自由競争とは、歴史的には19世紀後半に至るまでの資本主義に、しかも、とりわけイギリス資本主義にみられたのであり、反対に独占とは19世紀末より今世紀初頭にかけてはじめて自由競争の否定のうえで、主要資本主義国に確立したものである。したがって、両者は、どうみても、一つの生きた現実的な過程性のなかに、いわば内面的な交渉関係をもちながら共存し、しかもそのなかで対立し合ったものではない」<sup>30)</sup>からである。つまり、一つのものに帰属することのない自由競争と独占とを、現実的矛盾とし、それを基軸として帝国主義を考えていくことは根本的に誤っているということになる。したがって、帝国主義を規定する主要矛盾というなら、それは、独占的運動原理の基礎となるべき現実的な対立関係を考えねばならず、そのようなものとしては、独占間の競争こそが中心にすわるべきであるとされる。だが、氏のこの特異な発想法は、その中に聞くべき部分も少なからずあるが、独占を自由競争から完全な社会化への過渡期と位置づけたレーニンの展開が十分に理解されているようには思われない。氏はなにか支配原理が交代することを、一方が他方によって全面的に否定されるかのように理解されているが、もしそうなら、帝国主義は資本主義を上から下まで全て改造しつくすことができるのであり、帝国主義の専一支配、もしくは純粋帝国主義

30) 富森虔児「帝国主義研究における若干の問題点」北大『経済学研究』第20巻第3号、53ページ。



が可能になってくることになる。また、資本主義一般の基本的特質は帝国主義段階においては、まったく存在する余地のないものにされ、帝国主義を、このような古い資本主義という土台との関連なしに考えることになってしまうだろう。その結果、資本主義の基本的特質が基底に広範に存在し、そのなかからたえず独占がその対立物として生みだされることと、このようにして成立した独占が、逆に、基底にたいして与える、強制、抑圧の関係が、そして最後に、こうしたことが全体として生みだす帝国主義の諸矛盾の激化ということが正しく把握されなくなるだろう。矛盾は、たかだか、その一要素にすぎない独占間の競争に限定されてしまうのである。

以上、われわれは、わが国のいくつかの傾向についてレーニンの見解と対比させながら検討してみた。次に、帝国主義は古い資本主義の上部構造であるということの意味内容を、さらに、立入って論じてみよう。

#### IV

最初に、独占と自由競争について考えてみよう。周知のように、レーニンは、独占を「帝国主義のもっとも奥深い経済的基礎」<sup>31)</sup>と呼び、「もし帝国主義のできるだけ簡単な定義をあたえることが必要だとすれば、帝国主義とは資本主義の独占的段階であるというべきであろう」<sup>32)</sup>と述べているように、帝国主義の本質を規定するものとして独占を把握していた。したがって、それは個々の具体的な主体である独占体や、その種々の現象形態であるカルテル、トラストなどを意味するばかりでなく、それらをふくむ、より一般的、包括的な概念として把握されうるものである<sup>33)</sup>。このように把握される独占は、資本主義と商品

31) 『レーニン全集』第22巻、前掲、319ページ。

32) 同、307ページ。

33) レーニンは『帝国主義論』において、この独占の主要なあらわれとして、①生産の集積から発生した独占 ②原料資源の独占 ③金融・信用の独占＝金融寡頭制 ④植民地の独占をあげているが（『レーニン全集』第22巻、346-347ページ）、それ以外にも『帝国主義論』の中から独占のあらわれを数多く検出することができる。たとえば、「独占に、その抑圧に、その専横に服従しないものが独占者によって絞めこられる」（生産の集積からの独占の発生、同、237ページ）、「ひかえめな仲介者からひとにぎりの独占者」への転化＝「全能の独占者」となること（銀行独占、

生産との基本的特質である自由競争の直接の対立物であり、「資本主義制度からより高度の社会経済制度への過渡」<sup>34)</sup>、あるいは、「競争の完全な自由から完全な社会化への過渡をなす新しい社会秩序」<sup>35)</sup>を表わす段階的範疇、つまり、資本主義の独占的段階ともいふべきものを作りだす。この段階においては独占は、独占原理を行使することによって、社会と経済のあらゆる側面に浸透し、そこに支配と強制の関係をうちたてるのである。だから、独占の抑圧と専横に服従しないものは、独占によって絞め殺されるのであり、「自由競争は、それが独占を生みだしたあとでは、(支配原理として存在することは——引用者)もはや不可能なのである。」<sup>36)</sup>にもかかわらず、独占そのものが自由競争のなかから、生産の集積の一定の段階で生みだされたものであり、事態は資本主義的自由競争から資本主義の独占への転化である以上、この段階においても、資本主義の基本的特質——交換、市場、競争、恐慌等々——は排除されず、その基底に広範に存在している。だからこそ、この過渡期は、激しい対立、軋轢、紛争を生みだし、矛盾を尖鋭化せざるをえないのである。

「カルテルによる恐慌の排除ということは、ぜがひでも資本主義を美化しようとするブルジョア経済学者たちのおとぎ話である。だが事態は反対である。いくつかの工業部門で形成されつつある独占は、総体としての全資本主義的生産に固有の混沌状態をつよめ激化させている。」<sup>37)</sup>「帝国主義のまさにもっとも深刻な、もっとも根本的な諸矛盾——すなわち、独占と、それとならんで存在している自由競争との矛盾、金融資本の巨大な『取引』(および巨大利潤)と、

同241ページ)、「金融資本は……金融寡頭制の支配を強化し、全社会にたいして独占者への貢物を課している」(金融寡頭制、同、268ページ)。「金融資本は独占体の時代をつくりだした。独占体はいたるところで独占原理を伴う。……こうして、資本の輸出は商品の輸出を促進する手段となる」(資本輸出、同281ページ)、「このような独占体は、すべての原料資源が一手ににぎられるときにもっとも強固である」(原料独占、同300ページ)、「植民地の領有だけが、競争者との闘争のすべての偶発事……にたいして、独占に成功の完全な保障をあたえる」(植民地独占、同301ページ)等々である。

34) 同、346ページ。

35) 同、236ページ。

36) 同、335ページ。

37) 同、239ページ。

自由市場における『正直な』商売との矛盾、またカルテルおよびトラストと、カルテル化していない産業との矛盾、等々——」<sup>38)</sup>の一層の激化をもたらす。「独占資本主義が資本主義のあらゆる矛盾をどれほど激化させたかは、周知のところである。ここでは、物価騰貴とカルテルの圧迫を指摘すれば十分である。矛盾のこの激化こそ、世界金融資本が最後に勝利したときからはじまった歴史的過渡期の、もっとも強力な推進力である。」<sup>39)</sup>

われわれは、これまでの展開によって、独占が支配原理になることの意味を明らかにし、同時に、自由競争を排除することができず、それとの活路のない矛盾のうちにあることも明らかにしてきた。だから、帝国主義が資本主義一般の上部構造であるということは、独占が支配原理となり、社会と経済のあらゆる側面に支配と強制をもちこみ、その意味では、自由競争はこの時代の支配原理の地位をさり、副次的な要因に転化させられ、著しくその作用範囲をせばめられるが、独占という上部構造の基礎として、それを生みだす土台として広範に存在することになる。したがって、独占は競争と対立し、激しい矛盾のうちにあるながら、同時に、それを排除することができず、相互に結びついてもいるのである。要約すれば、レーニンは、一方では、あくまでも歴史の発展過程を客観的、必然的なものとみ、商品生産が資本主義をうみ、この資本主義が生産の集積の特定の段階で独占を生みだすことによって帝国主義に転化したととべることによって、この過程を忠実にたどる努力をたえず行なっている。それと同時に、それぞれの段階での支配原理を明確にすることによって、段階の確定を行ない、この段階の支配原理のもとに、それ以前の支配原理が作用範囲をせばめられ、副次的なものに転化し、後景におしやられることも明らかにしている。したがって、発展過程を時系列的にたどる努力とともに、それが同時的な存在として並存している具体像としては、それを上部構造と土台として描いていることになる。だから、帝国主義を古い資本主義の上部構造であると規定

38) 同, 339ページ。

39) 同, 347ページ。

することによって、商品生産から独占までの発展過程が明確にされるとともに、独占というこの段階の支配原理によって、それ以前のものが強制、支配、制限され、これによって包括されることが同時に明らかにされ、事態を立体的に把握することが可能になってくるのである。

同様の意味で、世界市場恐慌と帝国主義戦争について考えてみよう。「体系」においては、資本主義の諸矛盾の集中的な爆発形態として世界市場恐慌が位置づけられていた。この恐慌は、帝国主義になっても排除されるものではないことはいうまでもない。だが、地球の領土的分割の完了という結果としての世界経済の条件のもとでは、「一方における生産力の発展および資本の蓄積と、他方における植民地および金融資本の『勢力範囲』の分割とのあいだの不均衡を除去する」<sup>40)</sup>のは、帝国主義世界戦争以外にはありえないのであり、この時代の資本主義の諸矛盾を帝国主義戦争として爆発させたのである。だから、ある意味では、レーニン『帝国主義論』の課題は、帝国主義戦争として矛盾を爆発させた、20世紀初頭の、結果としての世界経済の概観図をあたえることによって、この戦争の必然性を明らかにすることにあつたということもできよう。その意味では、帝国主義における矛盾の集中的な爆発形態（それと同時に、資本主義の解決形態でもある）を帝国主義世界戦争と世界恐慌の二つにもとめ、しかも両者に同一の役割を与えている宇高氏<sup>41)</sup>や柳田氏<sup>42)</sup>の所説には到底承服できない。その理由は、両氏はともに問題を一般論的にのみ論じていて、この時代の結果としての世界経済の特殊、具体性に注意をむけていないからであり、また、宇高氏にあっては、レーニン『帝国主義論』の課題であつたI大戦の必然性、その経済的基礎の分析という範囲をこえて、なにか『帝国主義論』によって、帝国主義段階の全ての矛盾の基礎がことごとく分析されていると拡大解釈され

40) 同、318ページ。

41) 宇高基輔「レーニン『帝国主義』の現代的意義」『現代帝国主義講座』第1巻所収、日本評論新社、1963年、11ページ。

42) 柳田 侃「現代世界における危機の構造」『講座マルクス主義』第11巻所収、日本評論社、1970年、104ページ。

ているからである<sup>43)</sup>。われわれは両氏の批判をかねて、恐慌と戦争についてのレーニンの考え方を少しみてみよう。

レーニンは、「資本主義のもとでは、個々の経営や個々の国家の経済的發展が均等に成長するということとはありえない。資本主義のもとでは、破壊された均衡をときどき回復する手段は、産業における恐慌と政治における戦争よりほかにはありえない」<sup>44)</sup>（傍点引用者）とのべて、均衡をとりもどす二つの手段の概念上の違い——政治上の概念と経済の概念——を明確にしている。この視角は、新綱領作成過程でのソコリニコフ批判につながっている。そこでは、恐慌と戦争とを帝国主義に伴う二者一体的な現象として、両者を無媒介的に結びつけるソコリニコフをきびしく批判している。まず、恐慌は資本主義に固有な現象であるのにたいし、戦争は（帝国主義戦争も）そうではない。だから、「恐慌と戦争とを結びつけるということそれ自体が、やはり誤りである。なぜなら、この二つはまったく別種の現象であって、ちがった歴史的起源をもち、ちがった階級的意義をもっているからである。」<sup>45)</sup>したがって、正確には、帝国主義という古い資本主義の上部構造だけが帝国主義戦争を生み出したというべきである。そして、この帝国主義戦争は帝国主義の諸矛盾の集中的爆発形態であるばかりでなく、マルクス・エンゲルスが世界市場恐慌に社会変革を強制する手段をみていたように、世界的危機を生み出す「全能の舞台監督」<sup>46)</sup>として位置づけられていたのである。だから、ここでは、恐慌（経済）を契機にして社会変革（政治）が語られるのではなく、この時代の経済的諸矛盾が、その集中的表現<sup>47)</sup>としての帝国主義政治にはねかえり、それが帝国主義戦争（帝国主義政治の継続）<sup>48)</sup>となって集中的に爆発する必然性が語られ、そこから、この戦争の内

43) この点については、すでに、杉本昭七『現代帝国主義の理論』青木書店、1968年、第2章第3節参照。

44) 『レーニン全集』第21巻、大月書店、351ページ。

45) 『レーニン全集』第26巻、大月書店、157ページ。

46) 『レーニン全集』第23巻、大月書店、329ページ。

47) 「政治は経済の集中的表現である。」『レーニン全集』第32巻、大月書店、79ページ。

48) 「戦争は別の一すなわち暴力的な手段による政治の継続である。」『レーニン全集』第21巻、前掲、310ページ。

乱への転化という形で社会変革(政治)が位置づけられている。したがって、社会変革の見地からみるなら、政治と経済との関係が一層緊密に結びつけられ、直接政治的な危機として資本主義の諸矛盾が現われてくるのであり、まさに、帝国主義の時代は、資本主義から社会主義への過渡期、革命的危機、死滅しつつある資本主義の時代である。この時代にあっては上部構造(政治)の土台(経済)への反作用も一層強化されるのであり、国家独占資本主義の問題もあらわれてくる。

このように、帝国主義戦争がこの時代の資本主義(帝国主義)の矛盾の爆発形態としてあらわれることによって、恐慌は資本主義一般の基本的特質である以上、排除されることはないが、かつての位置をしりぞき、この帝国主義戦争の影響下に、それとの相互関係のなかで進行するようにならざるをえない。つまり、帝国主義戦争によって恐慌が規定されてこざるをえなくなるのである。しかも重要なことは、レーニン『帝国主義論』の分析対象であるこの時代の世界経済は、世界の領土的分割が、帝国主義諸国家間の競争形態の特質をなし、もっとも根本的な矛盾の根底をなしていたという条件のもとにあったということを忘れてはならない。だから、ここからただちに、帝国主義の矛盾は帝国主義戦争としてしか爆発しないと一般化してみることは、宇高氏や柳田氏のように、戦争と恐慌とを平面的にみるのと同様に、誤りであろう。

最後に、資本輸出と商品輸出についても同様のことがいえることをのべておこう。さきにのべたように、資本輸出は帝国主義の時代に典型的になったものであり、世界経済を構成する重要な現象のひとつであり、いわば、帝国主義のもっとも重要な現象、規定的な要因のひとつであるともいえる。資本輸出を通じ、植民地を独占し、原料資源を一手ににぎったとき、それは競争に打ち勝つ最良の手段になる。そうした意味で、商品輸出を通じる利益とは比較にならない、有利で高い利益を獲得できるのだが、それと同時に、この資本輸出がさらに、商品輸出に影響を与え、左右し、促進する側面もあらわれてくることにレーニンは深い注意をむけている<sup>49)</sup>。さらにそのみならず、過剰生産を含む、

国内の諸矛盾のはけ口、転稼先としても考えられていたのである<sup>50)</sup>。だから、資本輸出は単に、新しい現象としてつけ加えられるだけではなく、それが規定的な要因にすわることによって、商品輸出をその影響下におさえ、左右することが可能になり、したがって、両者のからみ合いをみなければならなくなるのである。

## V お わ り に

以上、「体系」と『帝国主義論』との関係を二重の意味で把握する立場からそれぞれの分析の出発点におかれ、それと同時に、矛盾が爆発する最終に位置するものを「世界市場」と「世界経済」として区別し、しかもこの後者が、前者を基礎とし、それに新たな現象が付加される、より包括的な概念であることの意味内容を、帝国主義は古い資本主義のうえにたつ上部構造であるというレーニンの指摘に沿って、独占(これと自由競争)、帝国主義戦争(これと世界市場恐慌)、資本輸出(これと商品輸出)などを例にとって、簡単に素描してみた。その結果、世界市場と世界経済との関係は、単に、後者が、前者を基礎とし、それに新たな重要な現象が付加されるばかりではなく、そのようにして成立した世界経済によって、世界市場が規定され、制約されるようになることが明らかにされた。だから、帝国主義段階では、世界経済こそが分析の出発点として、また、最後に位置するものとして指定され、そこにおける矛盾が帝国主義戦争として爆発するのである。こうなったとき、主として、商品、貨幣関係を通じる諸国民経済の国際的な結びつきと、その世界市場での対立、抗争が世界市場

49) 「資本の輸出は商品の輸出を促進する手段となる。」『レーニン全集』第22巻、前掲、281ページ。「資本の輸出は、資本が向けられる国で、資本主義の発展に影響をおよぼし、その発展を著しく促進する。」同、280ページ。また、ドイツを例にとって、植民地・従属国への貿易の方が独立国への貿易よりもふえていることを例証している。同、338-339ページ。

50) 『帝国主義論ノート』には、次のような著述プランがある。「(b)資本主義の三つの矛盾：1) 社会的生産と私的占有、2) 富と貧困、3) 都市と農村、ここから資本輸出。(a)それと商品輸出との相違」『レーニン全集』第39巻、大月書店、206ページ。ヒルファディングは、資本輸出が恐慌を緩和させるとさえ述べている。・R. Hilferding, *Das Finanzkapital*, Dietz Verlag, Berlin 1955, 未要訳。大月書店、465ページ。

恐慌として集中的に爆発するという過程をたどった「体系」は後景にしりぞかざるをえない。世界経済は、商品、貨幣関係を基礎とした世界市場を土台にして、そのうえに資本の輸出が加わり、今度は、この資本輸出によって、商品輸出が規制されてこざるをえない、より包括的で上位の概念であるといえるだろう。しかも、この世界経済の成立は、結果としての世界市場の不断の拡張の結果生みだされるもの<sup>51)</sup>であり、質的転化を伴う連続的發展を示しているが、この世界経済の成立によって、世界市場がなくなるのではなく、ただこの時代の世界を規定するものの位置を離れるだけであり、世界経済に規定される副次的な要因に転化して、存在することになるのである。だから、この時代の世界の諸矛盾を検出しようとするには、世界経済における諸矛盾の爆発をみなければならぬのは無論であるが、それとならんで、その基礎としての世界市場における諸矛盾がどうであるかを、しかも、前記の矛盾との関連のなかでもつかむことが必要になってくるだろう。

以上、われわれは、世界市場と世界経済との関係についてのべてみた。これによって、両者の関係が全面的に明らかにされたとは思わない。とりわけ、資本輸出の実態を明らかにすることによって、それと商品輸出との関係、再生産構造や産業循環との関係、国家間の従属の問題や半植民地に矛盾が集中していく過程などを明らかにする必要があるだろう。また、戦争と恐慌との関係について実態的に明らかにすることも重要であろう。これらの課題については、別稿に譲らざるをえない。ここでの最少限の結論は、世界市場と世界経済との区別を「体系」と『帝国主義論』との関係を見る際には、明確にする必要があるということであり、このようにして、それぞれの歴史段階の相違を明確にすることである。だから、同様の意味で、『帝国主義論』の規定をそのまま現代にまで演繹的に適用させようとしたり、あるいは、『帝国主義論』になかった新たな現象を、単に付加することをもって、現代の帝国主義の本質的特質を把握することが可能になると考えてはならないであろう。『帝国主義論』がI 大戦

51) 吉信 爾，前掲論文，150-151ページ。



としてその矛盾を爆発させざるをえなかった、この時代の世界経済の具体的状況を出発点として論理展開したことの意味をつかむべきであり、この世界経済そのものがどのように変化したかということをもまずなによりもさきに明らかにしなければならないだろう。レーニンは、I大戦の結果が世界経済にどのような影響を与えたかを端的につぎのようにのべている。「帝国主義、すなわち独占資本主義へ発展した資本主義は、戦争の影響をうけて、国家独占資本主義へ転化した。われわれはいまや世界経済のこの発展段階に到達している」<sup>52)</sup> (傍点引用者)。このレーニンの視角を、さらに、全般的危機という経済の運動法則を規定するより広い歴史的規定性によって限定させることによって、その後の帝国主義の解明に生かす必要があるだろう。それはわれわれの緊要な課題である。

52) 『レーニン全集』第26巻、前掲、399ページ。